連載85 在宅医療奮闘記

平成7年より在宅を開始した私の思い出

（医）東西会 千舟町クリニック院長
橋本 満義（65歳・内科）

お祭り ワッショイ!ワッショイ! でも転んじゃった!!

昨年の夏祭り「盆踊り大会」での出来事です。最近の介護施設では、入所者患者さんのためだけでなく、職員教育そして団結心を期待する上での、貴重なイベントとなりつつあります。

オープニングは、太鼓の激しく勇ましい音が祭りモードを盛り上げます。続いて、子ども達の元気いっぱいの妖怪ウォッチパフォーマンス！かん高い声が響きます。そして、熟女たちによるハワイアンショーに魅了されます。そのころには、おいしい焼き鳥とビールで私たちの身体リズムも調子がでてきています。

さて、いよいよ祭り前半の山場「櫓（やぐら）からの餅まき大会」の始まりです。天に舞うたくさんのお餅たち！子どもや患者さんたちに十分いきわたるようにと、投げる風に配る優しい施設長さん。と、その時でした「ギャー！」という悲鳴が、賑（にぎ）やかなお囃子（はやし）の音に混じって、かすかにですがはっきりと聞こえてきたのです。人の波の様子でそれは現実に起こったことだとわかりました。

やがて、医療班として白衣のままで表玄関に待機していた私のところに、車椅子ごと後ろにひっくり返ってしまい、頭にたんこぶができてしまった、いつもの患者さんが運ばれてきました。それは、在宅患者さんのM.Kさん（75歳、女性、認知症・糖尿病・脊柱管狭窄症）でした。不幸中の幸いで、症状も軽く合併症も出ていません。打撲症治療のため鎮痛剤を点滴し、1時間ほど見守ることにしました。

私は、M.Kさんに雑談ぽく話しかけました。「せっかくの楽しいお祭りだったのに、残念ですね。今回は打撲症くらいですんでよかったです。ご家族に連絡しましょうか？」。すると、M.Kさんは「娘や子ども達に連絡してほしいけれど、今どこにいるのかわからないのよ」と、寂しそうに答えます。施設長さんに問い合わせてみると、ご家族から全てをまかされているということでした。そして、何が起ころうと連絡されるのを拒否しているのだそうです。

本当に、人生いろいろです。M.Kさんはとても人懐っこい方で、私とも自然に打ち解けあえてきました。ですが、あくまで患者さんとかかりつけ医としての一線は越えないよう、冷静さを保ってきました。

このように施設や在宅で体感する「母と子の絆」の薄さ。それは、時代の写し絵なのかもしれません。

現代では、家族の絆は薄くなっていると、当たり前のように言われています。日本経済高度成長期の副作用だと、コメンテーターは論じています。

人生の後半に、世知辛（せちがら）い世の中であるとの認識は、お互い持ちたくないものです。今、私たち介護医療グループは、未来の生活空間に楽しさと安全を提供すべく、ノーマライゼーション構築の質の高さを常に目指し続けているのです。

「お医者さんが来てくれる」
24時間・365日態勢で対応（松山市全域）
私たちは質の高い在宅医療・看護・介護を目指しています。

医師数 21名
（常勤6名、非常勤15名）
内科・外科専門医 18名
（国立がんセンター勤務歴有3名）
精神科専門医 2名
麻酔科専門医 1名
（ペインクリニック科）
末期がん治療（緩和ケア）相談室開設!

Hyper Blood Viscosity（高血液粘度群）を科学する 臨床生命科学（体質・病態学、栄養学）研究所開設
「地方創生健康長寿研究会」平成27年4月1日発足
機能強化型・有床 在宅療養支援診療所
（医）東西会 千舟町クリニック
松山市千舟町6-4-9 Tel:089-933-3788
http://www.touzaikai.jp/